第二コリント書１－９章の書簡理論的・修辞学的分析

山田　耕太

１．はじめに

パウロがコリントの共同体に書き送った、いわゆる第二コリント書は、いくつかの手紙を組み合わせたものである、という仮説を巡って18世紀のゼムラー以来議論されているが、未だに決定的な解決を見ていない。すなわち、第二コリント書は、その内容から１－７章の「和解の手紙」と８、９章の「募金の勧め」と10－13章の「弁明の手紙」の大きく三つの部分で構成されている、と伝統的に考えられてきたが、その分割説は、大きく分けると以下の四つの立場に分かれる(1)。

第一に、１－７章が先に書かれ、次に10－13章の順で書かれ、いわゆる「涙の手紙」（２：４）が喪失したとする、ゼムラー＝ヴィンディッシュ仮説。ただし、ゼムラーは８章は１－７章とともに書かれ、９章は独立した手紙であると考えたが、この考えはマーティンやスラールらに継承されている。他方、ヴィンディッシュは、８、９章は、それぞれ独立した手紙だと考えた。それに対して、バレット、ファーニッシュらは、１－９章を１つの手紙であると考える(2)。

第二に、「涙の手紙」と10－13章を同一視し、10－13章が先に書かれ、その後に１－９章が書かれたとする、ハウスラート＝ケネディー仮説。この立場は、プランマーらに継承された(3)。

第三に、ハウスラート＝ケネディー仮説をさらに推し進めて、２章13節は内容的に７章５節に続く点から、２章14節から７章４節までの部分が別の独立した手紙の挿入であるとし、それが10－13章とともに先に書かれた「中間時の手紙」すなわち「涙の手紙」の一部であり、その後に１章１節－２章13節・７章５節－16節が書かれたとするヴァイス＝ブルトマン仮説。ただし、ヴァイスは、８章は独立した手紙で、第一コリント書の後に書かれ、９章は１－７章の続いた部分であると考え、他方、ブルトマンは８章は１章１節－２章13節・７章５節－16節の続きであると考え、９章は２章14節－７章４節と10－13章の「涙の手紙」に付加されたと考えた(4)。

第四に、ヴァイス＝ブルトマン仮説をさらに発展させて、２章14節－

7章4節が「涙の手紙」の一部ではなく、10―13章よりも先に書かれた「第一の弁明」という別の手紙であり、2章14節－7章4節、10－13章、1章1節－2章13節・7章5節－16節の順序で書かれたとする、シュミットハルス＝ボルンカム仮説。8章と9章に関しては、8章は7章に続くものであり、9章は独立した手紙であると考えられていたが、シュミットハルスは後に9章が7章に続くものであり、8章は独立したものである、と考えを変えた。それに対して、ゲオルギもベッツも、8章と9章はそれぞれ独立した手紙であると考える[5]。

さらに、6章13節の内容が7章2節に続き、6章14節から7章1節までの箇所が、その前後と内容がかなり異なるので、この箇所が挿入なのかそうでないか、パウロの真筆であるのかそうでないのか、もし挿入であるならば、真筆であるのかそうでないのかにかかわらず、それがどこに由来するのか、という点を巡って議論されてきたが、これも決着を見てはいない[6]。

以上のような分割説に対して、他方、第二コリント書は1章から13章まで一つの手紙である、という統一説も引き続いて見られる[7]。

本稿では、以上のような分割説を念頭に置いて、最近の文学批評の視点から、とりわけヘレニズム・ローマ期の書簡理論の視点[8]と修辞学の視点を併せ用いて[9]、紙幅の関係から10－13章の問題は別の機会に取り扱うことにし、ここでは1－9章に限って分析し、ヴァイス＝ブルトマン仮説やシュミットハルス＝ボルンカム仮説と異なって、1－9章が統一した手紙であると論じることを試みる[10]。

2．書簡理論と修辞学の関係

現存するヘレニズム・ローマ期に書かれた書簡理論のハンド・ブックで、著者がアリストテレスの書簡理論の影響の下で書簡の文体について言及したデメテリウス（紀元前1世紀－紀元後1世紀？）に帰せられるが、実際には紀元前3世紀から紀元後2世紀の間に書かれたと思われる偽デメテリウス『書簡類型論』[11]では、文体によって21類型の書簡とその簡単な文例が示されている。紀元4世紀から6世紀の間に書かれたと思われる偽リバニウス『書簡文体論』[12]では、41類型の書簡に分けられ、その文例のエッセンスが示されている。また、3、4世紀にラテン語とギリシア語の対照版で書かれたボローニャ・パピルスには、数種類に分けられる手紙の模範的な例文がいくつか断片的に残されている[13]。さらに、デメテリウス[14]の他に、キケロ[15]（紀元前1世紀）、セネカ[16]（紀

元1世紀)、フィロストラートゥス[17]（3世紀)、ナジアンザスのグレゴリウス[18]（4世紀)、ユリウス・ヴィクトリウス[19]（4世紀）が著作の中で、書簡理論について断片的に言及している。

他方、アリストテレスの『修辞学』の影響下でヘレニズム・ローマ期に書かれた修辞学のハンド・ブックには、アナクシメネス『アレクサンドロス宛修辞学』[20]（紀元前3世紀)、中世までキケロに帰されてきた(コルニフィキウスに帰されるべき）偽キケロ『ヘレニウス宛修辞学』[21]（紀元前1世紀)、キケロの修辞学的文書の中でも弁論術に関する三部作『構想論』『弁論術』『弁論家』[22]（紀元前1世紀)、さらにクインティリアーヌス『弁論家の教育』[23]（紀元1世紀）が主要な著作として挙げられる。この他、2、3世紀に修辞学が学校でいかに教えられたかを示す不詳のセグエリアーヌス（19世紀の発見者の名前に由来）『政治演説の技術』（200年頃）とガダラのアスピネス『修辞学』（210年頃)[24]や、3世紀後半から4世紀前半にかけて書かれた弁論家メナンドロスの「慰めの演説」と「葬礼演説」に関する演示弁論のハンド・ブックがある[25]。

距離の離れた人に書き言葉で書き送る書簡と人々の面前で話し言葉で語る修辞学的演説は、ヘレニズム・ローマ期で最も重要なコミュニケーションの手段であった。そして、それらはそれぞれ別の文学ジャンルであり、一見するとそれぞれ独立して発展してきたように思われる。だが、実際には書簡理論は修辞学の影響の下で発展してきたのであり、それぞれ相互に浸透していたと思われる[26]。

その理由は、第一に、ヘレニズム・ローマ期の書簡理論は、書簡の文体を『弁論術』の中で論じたデメテリウスに典型的に見られるように、数多くの弁論を書き残した弁論家や修辞学のハンド・ブックを書き残した修辞学者によって、しばしば論じられていたからである。書簡理論のハンド・ブックの著者が誤って帰されたデメテリウスばかりでなく、リバニウスも修辞学者であり、弁論家であり、書簡集も残している。キケロも弁論家で数多くの弁論を残し、修辞学の文書も数多く残している修辞学者でもあった。その上、キケロは膨大な書簡集を残しているが、その中で書簡理論について断片的に言及しているのである。セネカも対話篇や書簡集を書き残している。ナジアンザスのグレゴリウスは、神学者であり修辞学者であったが、弁論や書簡を数多く書いた。さらに、ユリウス・ヴィクトリウスは、クインティリアーヌスに多くを負っていた修辞学者であったが、『修辞学』の終わりに『説教学』と『書簡理論』を『修辞学』の一部として補って論じたのである。

第二に、ヘレニズム・ローマ期の書簡理論家たちによれば、書き言葉である書簡は、読者と著者の間にある距離を越えて、不在の相手を念頭に置いて話すように対話として書簡を書いた[27]すなわち、書簡は距離を置いた相手との会話に代わるコミュニケーションの手段として用いられたのである。相手に語るように書かれた言葉の中では、対話の中でと同じように、著者の性格が現わされた[28]。また一般的に言って、書簡の内容と構造は、修辞学に比べて自由であった[29]。ヘレニズム・ローマ期の書簡理論家たちの一般的な分類によれば、書簡は私的な書簡と公的な書簡に分かれていた。私的な書簡では私的でユーモアを交えたテーマが取り扱われ、公的な書簡では公的で真面目な問題が取り扱われたが[30]、私的な書簡では簡潔さが第一の基準であり、公的な書簡では修辞学が適用された[31]。すなわち、修辞学を用いて書いた最上で美しい書簡が、教育を受けた人も受けていない人をも説得することができると考えられていた[32]。

第三に、修辞学では、演説は裁判の法廷で行われた「法廷弁論」(*δικανικόν*)、政治的集会で行われた「議会弁論」(*συμβουλευτικόν*)、祭りや葬儀などの公的儀式で行われた「演示弁論」(*ἐπιδεικτικόν*) の三種類に分かれていた。他方、書簡理論では偽デメテリウス『書簡類型論』によれば21類型、偽リバニウス『書簡文体論』によれば41類型と夥しい種類の書簡に分かれていた。このように多岐に分類された書簡ではあるが、その根幹には、修辞学的演説と同じ基本的な構造があり、書簡理論はそこから枝分かれし、時代が下るとさらに多岐に分かれていったと思われる。すなわち、書簡理論を整理して大別すると、以下の3種類が根幹にあったと思われる。(1)「告発」(*κατηγορική*) と「弁明」(*ἀπολογητική*) あるいは「反論」(*ἀντεγκληματική*) の書簡[33]の類型。これらは主に過去に起きた出来事に対して議論される「法廷弁論」の具体的な内容を表す用語で分類されている。(2)「勧告」(*παραινετική*)、「助言」(*συμβουλευτική*)、「忠告」(*νουθετητική*) の書簡[34]の類型。これらは、主に将来の行動を促すために議論する「議会弁論」と同じ用語とその同義語で分類されている。(3)「称賛」(*ἐπαινετική*) と「非難」(*μεμπτική*) の書簡[35]の類型。これらは主に個人が現在具えている徳を公に讃える「演示弁論」の具体的内容を表す用語で分類されている。また、「慰め」(*παραμυθητική*) の書簡[36]も、「慰めの演説」という「演示弁論」の下位ジャンルの言葉で分類されている[37]。恐らく、称賛の内容を含む「推薦」(*συστατική*) の書簡[38]や、非難と同義語の「批判」(*ἐπιτιμητική*) や「攻撃」

(ὀνειδιστική) の書簡[39]も、「演示弁論」の下位ジャンルに属すると思われる。以上の大きな三つに大別される諸類型の書簡に、「友情」(φιλική) の書簡[40]、その他が付け加わり、書簡理論の類型が発展していったと思われる。

以上のように、書簡理論と修辞学は別々の文学ジャンルであったが、相互にかなり密接な関係があったことは明らかである。従来の新約学研究では、もっぱら書簡の様式を分析する立場からパウロ書簡を中心とする書簡の研究がなされてきた[41]。だが、最近では、一方では、書簡理論の視点からも解明されるようになり[42]、他方では、修辞学の視点からも解明されるようになってきた[43]。しかし本稿では、書簡理論と修辞学が相互に浸透するという立場から、どちらか片方のみではなく、両方の手法を併せ用いることによって分析を試みる[44]。それは以下の理由による。すなわち、書簡理論の視点で全体を解明したものと修辞学の視点で全体を解明したものは、視点の違いによるものであり、相互に矛盾するものではないと思われる。また、ヘレニズム・ローマ期の書簡を分類した偽デメテリウスの書簡理論にしろ、偽リバニウスの書簡理論にしろ、それぞれの類型で数行から長くても20行以内で文体の特徴や例文を示しているのにすぎない。このような書簡理論のみでは、公的な長い書簡の構造を適切に分析するには不十分であると思われる。さらに、「弁明」「助言」の書簡のように、修辞学の「法廷弁論」や「議会弁論」と全く同じ用語が書簡の分類で用いられている場合には、修辞学的視点からの分析は有効であると思われる。

３．第二コリント書１－９章の書簡理論的分析

ヘレニズム・ローマ期の書簡は、一般的に言って、書き手と受け取り手と始めの短い挨拶を記した「前書き」(prescriptio) と、書簡の内容である用件を述べた「本体」(corpus) と、終わりの簡単な挨拶を述べた「後書き」(postscriptio) の三つの部分に分かれていた[45]。さらに、「本体」は、始め、中、終わりという三部に構成されていた[46]。

（１）「前書き」（１：１－２）

第二コリント書は、「パウロ」と「テモテ」という書き手 (superscriptio) から「コリントにある神の教会」と「アカイア全土にいるすべての聖なる者たち」に受け取り手 (adscriptio) に宛てられ、それに「恵みと平和が父なる神とイエス・キリストからありますように」という始めの挨

拶（salutaio）が続く（1：1－2）。

（2）「本体」（1：3－9：16）

a．「慰めの書」（1：3－2：13，7：5－16）

差出人から宛名人への挨拶を含む「前書き」の直後に、新約聖書のパウロ書簡では、宛名人についての「感謝の祈り」が通例続く[47]。ところが、第二コリント書は、最初の挨拶の後に続いて、通例の「感謝」の言葉ではなく、「神を誉め讃えよ」という称賛の言葉が語られる（1：3－5）。そして、苦難の中で慰められた個人的な経験が語られた後に、11節で「感謝の祈り」が献げられる。パウロ書簡の導入には、打ち明け、称賛、願い、喜び、驚きの言葉や、以前語ったことや現在聞いていることなどの言葉が用いられる[48]。ここでは「知らないでいてほしくはない」（1：8）という打ち明けの言葉[49]から本論が始まるのではなく、導入部は、11節の「感謝の祈り」まで続くのである[50]。

そして、最後は「喜び」の言葉で結ばれる（7：16）。

「和解の書」[51]あるいは「喜びの書」[52]と呼びならわされてきたこの箇所は、以下のような内容である。すなわち、パウロが旅行計画を変更した（1：15－22）二度目のコリント訪問時に、パウロを「悲しませたある人」（2：5）すなわち「不正を行った人」（7：12）の行った「出来事」（πρᾶγμα，7：11）の問題で、コリント滞在を中断してエフェソの戻ってしまう（いわゆる「悲しみの訪問」あるいは「中間時の訪問」）。パウロは再び「悲しみの訪問」をすまいと決心して（1：23－2：2）、その代わりに通称「涙の手紙」と呼ばれる手紙を書き送る（2：3－4，9，7：8）。この手紙は第二コリント書10－13章と同一視できず、喪失してしまったと思われるが[53]、恐らくテトスがコリントに派遣される際に、この手紙を携えて行ったと思われる。パウロがテトスをコリントへ派遣する以前とテトスとマケドニアで再会する以後という時間的経過によって、この箇所は2章13節以前と7章5節以後とに大きく二分されている。パウロはテトスとマケドニアで再会することによって、コリント人たちが彼らを「悲しませた」（7：8－11，2：5）「涙の手紙」に対して熱心になって応答し、パウロを「悲しませた」当事者を処罰したことまでの過程を知り（7：11－12，2：6）、テトスとともに「慰め」と「喜び」を経験して「嘆き悲しみ」（7：7）の中にいるコリント人たちを励まし（7：6－7，9，13，16．1：3－7，7：4，参照）、当事者が「過度の悲しみで倒れないように」愛をもって赦すこと

を勧める（２：７－10)。

以上のようなパウロとそれを聞いたコリント人たちと処罰された人の三重の「悲しみ」と、パウロの「慰め」と「喜び」で、コリント人たちを「励ます」というモティーフで書かれ、さらに処罰された人を赦すという内容は、「悲しみ」に陥っている人を「癒す」というモティーフで書かれた「和解の書」(*θεραπευτική*)[54]や幸運に恵まれた人と「共に喜ぶ」というモティーフで書かれた「祝辞の書」(*συγχαρητική*)[55]ではなく、「悲しみ」に陥っている人を「励ます」というモティーフで、「悲しみ」を主題（*πρᾶγμα*）にした「慰めの書」(*παραμυθητική*) の類型に分類される。偽デメテリウスによれば、「慰め（の類型）は、手に負えなくなったあることで、悲しみに陥った人に対して書かれるものである」。また、このような「悲しみ」の中にいる人を慰め、励ます簡単な一つの例文が示されている[56]。同様に、偽リバニウスによれば「慰め（の文体）は、悲しむようなことに直面した人を慰めるものである」[57]と簡潔に表現されている[58]。

b．「弁明の書」（２：14－７：４）

この箇所は、「慰めの書」の荘重な導入部に比べれば簡素であるが、新たに感謝の言葉から始められ（２：14)、まるであたかも別の内容の手紙が始まったかのような印象をすら与える。また、この箇所の真ん中でも同じような感謝と神を称賛する言葉が見られ（４：15)、そこで一連の議論が一応打ち切られ、それ以下で新しい内容の議論が展開される。また、最後は、「慰め」と「喜び」の言葉で結ばれるが、それは「慰めの書」の導入部を簡潔に繰り返しており、この箇所が独立した書簡ではないことを示唆する（７：４)。

ここは10－13章に先立つパウロの使徒職の「第一弁明」としても知られているが[59]、そこには次のような内容が含まれている。すなわち、パウロは推薦状を持っていないことで語る資格について批判を受け（２：16ｃ，３：１)、不純な動機から語り（２：17)、自分自身を語っている（４：５）と語る内容について非難されていた。それに対して、コリント人自身が推薦状であり（３：２，３)、神から語る資格を授けられていることを先ず第一に反論する（３：４－６)。それに続いて、パウロの語る内容が、モーセとキリストを対比させて内面的な事柄に係わる「新しい契約の務め」であることを弁明し（３：７－４：６)、それを身をもって証しする（４：７－15)。さらに、それが神との「和解の務

め」であることを弁明する（5：11－19)。最後に、神との和解を受け入れることを「勧める」勧告の言葉に移っていくが（5：20－21，6：1－2)、ここにおいても「和解の務め」を身を持って証ししてきたことを述べる（6：4－10)。そして、結びの勧めの言葉と（6：11－13、7：2－3）警告の言葉（6：14－7：1）に導かる。

以上のような内容は、「告発」されていることを「弁明」するモティーフで書かれた「弁明の書」(ἀπολογητική) と全く一致する。それは、偽デメテリウスによれば、「弁明（の類型）は、告発されていることに対して、証拠をもって反対の議論に導くものである」と表現されている[60]。

c.「助言の書」(8：1：1－15，9：1－15) と「推薦の書」(8：16－24)

8章と9章は、エルサレムの貧しい聖なる者たちへの募金について、かなり重複するが、微妙に異なる内容が書かれている。両者はほぼ同じ時期にコリントの共同体とその周辺のアカイア地方の人々という異なる地域に宛てられたものか、あるいは9章は8章の内容を補うためにやや時期を置いて書かれたものと思われる[61]。

8章は「兄弟たちよ、あなたがたに知ってもらいたい」（8：1）と打ち明ける言葉から始まり、それまでの「慰めの書」や「弁明の書」とは全く異なる内容が語られる。また、8章16節の神への「感謝」の言葉から、さらに新たな導入がなされる。だが、8章には結びの「感謝の祈り」や挨拶に相当する言葉は見当たらず、8章と9章が連続している印象を与える。9章の始まりも、「聖なる者たちへの奉仕について、あなたがたに書くことは（既に）十分です」（9：1）と以前に語ったことが前提になっており、9章は独立した章ではなく[62]、8章を前提にして書いていると思われる[63]。9章の最後では8章と9章の結びと思われる募金の「贈り物」を神に「感謝」する祈りの言葉で締め括られる（9：15)。

「募金」についての箇所の内容は、以下の通りである。すなわち、コリントで募金が始まったのであるが、それが「悲しみの訪問」以後はパウロに対する誤解と批判のために停止し、マケドニアの諸共同体の方が先に予想以上の成果を挙げて終了してしまった（8：1－5，9：1－2)。そこで、パウロはまず第一に募金活動に直接的に係わるテトスに対して促し（8：6)、次に直接コリント人に向かって募金活動を再開して完了するように促す（8：7－15，9：6－14)。しかし、これは命令ではなく、助言であると述べ（8：8)、強制力をもって行うので

はなく、あくまでもパウロが自分の意見を表明したのにすぎないと述べる（８：10，９：６）。

以上のような内容は、良いと思われることを勧め、悪いと思われることを阻止するモティーフで書かれた「助言の書」の類型に分類される。すなわち、偽リバニウスによると、良いことを勧め、悪いことを阻止する内容の書簡もさらに二種類に分かれ、ある見解に対して反論することが許されない「勧告の書」（παραινετική）と、反論することが許される「助言の書」（συμβουλευτική）とに分類されていた[64]。しかし、ここではパウロが強制ではなく、自由に判断できる助言として意見を表明しているので、後者に分類されると思われる[65]。

８章16節の「感謝の祈り」以下で、テトスと二人の兄弟たちをコリントに派遣する内容が述べられている。そこでは募金活動を再開し、実施するのにあたり、テトスの熱心さ、熱意、自発性が称賛され、また兄弟たちが地域共同体の中で評判のよい人々であり、共同体から選出された人で、募金活動を行うのに信頼に値する人々であると評価されている（８：16－24）。このような内容は、書簡の受け取り手に未知の人を既知であるかのように称賛して紹介するモティーフで書かれた「推薦の書」（συστατική）[66]に分類される。すなわち、８章前半と９章の「助言の書」の中に、「推薦の書」が挟まれていることになる。

（３）「後書き」

第二コリント書全体の終わりの挨拶と祝福の祈りを含む「後書き」は、「最後に」（λοιπόν）という言葉に続く末尾にしるされているが（13：11－13）、１－９章の箇所に「後書き」は見られない。このことから、もし１－９章と10－13章が別の書簡であり、後に二つの書簡が一つに編集されたのであるならば、１－９章の「後書き」は10－13章と繋がれた時に省略されたのであろう。あるいは１－９章と10－13章は、ある程度の時間を置いて書かれたとしても、最初から１つの書簡であったならば、１－９章の「後書き」は始めから存在しなかったのであろう。

（４）まとめ

以上、書簡理論の視点で第二コリント書１－９章の「本体」を分析してきたが、多少順序が入れ替わる箇所があるにしても、それが大きく分けて三部で構成されていることが分かる。しかもそれぞれの箇所は、始まりには導入の「感謝」や「打ち明け」の言葉があり、また終わりにも

「喜び」や「感謝」を表す結びの言葉があり、書簡としてある程度の纏まりを成している。もし以上の分析が正しければ、1－9章には「慰めの書」、「弁明の書」、「助言の書」ならびに「推薦の書」という異なった書簡の類型が存在することになる。さて、ヴァイス＝ブルトマン仮説にしろ、シュミットハルス＝ボルンカム仮説にしろ、このような書簡理論の視点から得られた結果に近い分析を行うのであるが、その結果これらを資料説の背景から見て、それぞれ異なった資料に基づいていると考えて、分割説を採用するのである。しかし、これらの資料をいつ、誰が、細部を縫い合わせるように極めて技巧的な方法で、編集したのか、またどのような理由で、現在ある箇所にそれぞれ挿入されなければならなかったのか、などの諸点を考えると、資料説に立った分割説は極めて不自然である。その点、書簡理論の視点から考え直すと、1つの書簡の中に複数の異なる類型の書簡があるのは「混合した書」（μικτή）[67]という類型に属するものであり、決して不自然なことではない。第二コリント書1－9章は、この類型に属すると思われる。

4．第二コリント書1－9章の修辞学的分析

書簡理論の視点で分析した書簡の構造は、修辞学の視点で分析する際の基本的な単位になるが、修辞学的分析ではさらに細部の構造まで全体を統一的に分析することができる。また、「前書き」以外の書簡の「本体」は、書簡理論では大きく分けて「慰めの書」「弁明の書」「助言の書」（そして「推薦の書」）に分類されるのであるが、それぞれ先に述べたように[68]演示弁論、法廷弁論、議会弁論（ならびに演示弁論）の文体と密接に関連している。しかし、第二コリント書1－9章全体を修辞学的視点で見ると[69]、以下のように構成されている。

（1）序論（Exordium，1：3－11）[72]

修辞学的配列の導入部である「序論」（exordium）は、語られる事柄に聴衆の関心を起こして、共感を得ることがその目的であるが、聴衆の感情に訴える。すなわち、語られることに対して、好意的で、注意深く、受け入れる、準備をさせることである。そして、好意や注意を得るために、しばしば話し手自身や聞き手を称賛する[72]。一般的に言って、パウロ書簡の冒頭の神への感謝の祈りや神を称賛する言葉は、読者と著者の間の親しい関係を前提にしてそれらの言葉で読者を神の前で讃えて、読者の関心と共感を得ようとしているところから、修辞学的視点で見ると

「序論」の中に入れられる。

パウロは、序論の前半ではまず最初に「憐れみと慰めの神」を称賛し（１：３)、読者の感情に訴える。それは苦しみの経験の中で慰められたからであり、また同じ苦しみの経験の中にいる人を慰めるためである、と「苦しみ」と「慰め」を分かち合う経験を一般的に述べる。そして、コリント人たちはパウロと「苦しみを共にしている」ので「慰めをも共にする」と両者の親しい関係に訴えて、読者の共感を得ようとする（1：4－7)。後半では、一般的に述べた事柄の背後にあるパウロ自身の個人的な経験について言及し、死を覚悟する苦しみの中から救い出されて慰められたことを打ち明け、それを知った多くの人々が神に感謝することを願う（１：８－11)。

以上のような「苦しみ」と「慰め」のテーマは、それらと密接に関連する「悲しみ」と「喜び」のテーマと共に、第二コリント書１－９章全体で支配的であるが、それが次の「命題」で問題点が挙げられるパウロとコリント人たちとの間にある問題と深く関係しているのである。

（２）命題（Propositio，１：12－14)[72]

「序論」の後に、通例は「陳述」(narratio）が続くが、その前後に議論を明確にして受け入れやすくするために、「陳述」の内容の核心を要約したり、証明されるべき事柄を要約した「命題」(propositio）が置かれることがある。すなわち、議論のテーマが何であるかを前もって示すのである[73]。これは「反論」(probatio）ないしは「論駁」(refutatio）などの問題点を数え上げる「列挙」(partitio）とも似ている[74]。

パウロは「序論」で読者との親密な関係を築き上げた後に、何が問題点であるかを端的に要約して提示する。それは第一に、パウロがとりわけコリント人たちに対して、「神の聖さと純粋さによって……行動してきたこと」（１：12）で、誤解を解こうとする点である。パウロはこの点を良心をもって証し、誇りにしている。すなわち、この背後には、パウロが不純な動機で、神の言葉を「売り物にし」（２：17，参照)、「悪賢く」「曲げている」（４：２，参照）という非難があったのである。さらに、以上のような言明に対して、「人間的（肉的）な知恵」ではなく「神の恵み」によって行動してきたことを補足的に説明する（1：12)。

第二に、パウロはコリント人たちが現在は「部分的」にしか理解していないが、手紙を読んだ後には「完全に理解すること」を求める点であ

る（1：13, 14a）。現在は「部分的」にしか理解していないというのは、具体的にはコリント人たちが「涙の手紙」に従順に応答した点を指す。「完全に理解すること」とは、結局はこれから述べる使徒職の務めと資格についてであり、その具体的な展開である募金活動についてである。

第三に、パウロにとってコリント人が誇りとなり得るように、コリント人たちにとってもパウロが「誇りであること」を理解するようになる点である（1：14b）。すなわち、現在パウロは誤解によってコリント人たちにとって誇りとはなっていないのである。コリント人たちがよくパウロを理解した結果、パウロがコリント人たちにとって誇らしい存在となることをパウロは願っているのである。このようにこの手紙では、「誇り」と「恥」という対照的な概念が鍵言葉となっている。以上の三つの問題点は、具体的には次の「陳述」の中で述べられるある出来事によって表面化するのである。

（3）第一陳述（Prima Narratio, 1：15－2：13）[75]

修辞学的議論の標準的な構造では、「序論」の後に「陳述」が来る。「陳述」では、議論で中核をなす「反論」（probatio）や「論駁」（refutatio）で取り扱われる問題の「出来事」（πρᾶγμα）が何であるかを述べる。「命題」との関係では、「陳述」では「命題」で述べたことをさらに詳しく述べることになる[76]。

パウロは、最初の陳述の箇所で、以下の三つの点を述べる。すなわち第一に、パウロは問題の出来事を述べる前に、パウロの「人格」（ἦθος）が疑われることになった旅行計画の変更について言及する。すなわち、パウロは計画を変更したのは「軽率だったのだろうか」「人間的に考えて（肉に従って）意図したのだろうか」と疑問（interrogatio）[77]を畳みかける（1：17）。しかし、パウロはこれらのコリント人たちの疑問に対して、強い「否」を主張するのである。すなわち、「人間的な知恵」ではなく、「神の聖さと純粋さによって」誠実に「行動してきたこと」（1：12、参照）を証しするのである（1：15－22）。

第二に、パウロは旅行計画を変更してコリント訪問を中断した「悲しみ訪問」の核心に触れる出来事について言及する。それはパウロにとって悲しみの経験であるばかりでなく、当事者にとってもパウロから悲しみを受ける経験であり、当事者を元気づけて「喜び」を得ようとして、「悲しみの訪問」を再度する代わりに、心の「苦しみ」と「多くの涙」

の中で手紙を書く（１：23－２：４）。すなわち、パウロがコリント滞在を中断して、旅行計画を変更したことに対して、ある意味では、中途半端な理解しかしていないコリント人たちに、パウロと当事者しか知らない「悲しみ」の出来事をよりよく理解してもらうために、「涙の手紙」を書いたのである（１：13，14ａ，参照）。

第三に、コリント人たちが「涙の手紙」に対して従順に応答したことを後日になって知ったことについて言及する。「涙の手紙」によってパウロを理解したコリント人たちの多数派が、当事者を処罰したことを知ったパウロは、今度は過度に悲しみに陥らないように当事者を赦し、励まし、愛するように願う（２：５－11）。ここは時系列上では、「悲しみ」の出来事の後のことであり、「涙の手紙」を書いたことの結果に対する現時点で「願う」（παρακαλῶ）ことが重なっている。

最後に、「涙の手紙」を書いた直後の時点に戻り、その後、トロアスを経てマケドニアに向かったことが述べられが（２：12－13）、ここで叙述は一端中断し、この続きは７章５節で再開される。すなわち、２章14節から７章４節までの箇所は、修辞学的視点で見ると大きな「逸脱」(digressio)[78]である。なお、「逸脱」は「陳述」にしばしばみられるが、そればかりでなく「序論」「反論」ないしは「論駁」「結論」にも見られる[79]。

（４）反論（Probatio，２：14－７：４）[80]

修辞学的議論の中核をなす「議論」(argumentatio) は、語られることを受け入れられるものにするためのものであるが、それはある立場の意見が確かであることを証明するものである。「疑問」(questiones) や「証明」(confirmatio) と同義語である[81]。修辞学では送り手の「人格」(ἦθος) に訴えるものと、受け手の「感情」(πάθος) に訴えるものと、取り上げられる話題の「論理」(λόγος) に訴えるものに分けられる、「議論」ないしは「証明」で問題になるのは最後の範疇である[82]。「論理」に訴えるものは、「証拠」(signum)・「論証」(argumentum)・「例証」(exemplum) の三つに大別されるが、その中心となるのは「論証」である[83]。また、一つの「議論」の中で複数の「証明」がなされることは通例である[84]。このような「議論」ないしは「証明」は、論敵との比較や対照の上で自分の立場を証明しようとする肯定的な「反論」(probatio) と、論敵を批判する否定的な「論駁」(refutatio) とに分かれる[85]。尚、複雑な「議論」の場合には、その導入部に、「議論」の問

題点を要約した「列挙」(partitio) が置かれることがある[79]。

この箇所から新しい議論の展開に入る。だが、この箇所は「陳述」が一端中断されて、「逸脱」の形で始まり、この前後の「陳述」の部分と一見すると直接的には無関係な議論が展開され、別の断片的な書簡が挿入されたような印象を与える[87]。だが、実はそうではなく、パウロがコリント訪問を中断した問題と密接にかかわるである。すなわち、「悲しみの訪問」の原因であるパウロ批判者に対して、積極的にパウロが自らの立場を弁明しようとするのである。それでは、なぜここで「陳述」が中断されて「逸脱」の形で「反論」が述べられるのであろうか。それはこの箇所の直前でテトスのコリント派遣とパウロのトロアスとマケドニアへの旅程が述べられたことと関係している。すなわち、テトスとの再開を述べる前に、コリントでのパウロ批判の問題の核心について言及し、パウロ批判者に対して用心深く念入りに「反論」し、それを「陳述」の間に挟み込むのである。

a．序論的導入と列挙 (Exordium et Partitio, 2：14－3：3)[88]

「感謝の祈り」から序論的導入が新たに始まる（2：14a)。それに続いて、ローマの凱旋行進での司令官と捕虜の比喩、とりわけそこで焚かれる香を比喩的に用いて、「いつでも」「どこでも」展開されるパウロの宣教の使命を逆説的な対比 (antitheton)[89]とアイロニー (ironia)[90]を用いて表現する（2：14b－16b)。その直後に、これから議論される互いに関連する二つの問題点が、疑問 (interrogatio) という形で端的に「列挙」されるが、それらに対して即座に答えられる。

第一に、「だれがそれにふさわしいか」（2：16c）と比喩的に示された宣教の任務に、パウロの批判者とパウロとどちらが「ふさわしいか」と二者択一を迫る。すなわち、使徒職という語る資格の問題である。この背後には、パウロは使徒の任務につくのに「ふさわしくない」という批判の言葉があったと思われる（Ⅰコリント9：1－3、参照)。このようなパウロ批判は、パウロの宣教の具体的な展開の中での金銭問題とからんでいたと思われるが、パウロは即座に「神の言葉を売り物にせず」「純粋さから」語ってきたことを述べる（2：17)。「純粋さ」は第一「命題」の鍵言葉（1：12）であり、それがここではさらに具体的に問われている。

第二に、「再び自分自身を推薦し始めたのか」「推薦状が必要なのか」（3：1）と疑問が畳みかけられる。パウロはエルサレムからの推薦状

を持たずに語り、また自分の内面的な（霊的な）経験を語るので誤解され、疑問視されることがあったと思われるが、即座にコリント人たちこそ「心に書かれた推薦状である」と答える（３：２－３）。自己推薦の問題は、第三「命題」の「誇り」（１：14b）ないしはその反対語の「恥」と表裏一体をなす問題であり（４：２，５：12，６：４，参照）、「誇ること」の問題が具体的に問われている。

以上の二点の疑問点を理解することで「完全に理解する」という第二「命題」（１：13－14a）の問題が具体的に取り扱われる。またこれらは、パウロの論敵の批判的な疑問を直接的に反映していると思われるが、それに対して、それぞれパウロとコリント人たちの「人格」（ἦθος）に訴えて、すかさず反論したのである。だが、以下では「論理」（λόγος）に訴える「証明」を展開する[91]。

b．第一証明（Prima Probatio，３：４－４：15）

第一の証明は、「ふさわしさ」の問題、すなわち使徒職という語る資格についての問題が論じられるが、その議論は長く複雑に展開されていく。大きく分けて、①モーセと対比した「新しい契約の務め」（３：４－18）、②その務めで語る対象である「栄光のキリスト」（４：１－６）、③その務めを果す「パウロの証し」（４：７－15）が述べられる。これらを通してパウロの「ふさわしさ」が確証される。

①「新しい契約の務め」すなわち「論証」（Argumenta, ３：４－18）

まず最初に、自分自身で語るのに「ふさわしい」としたのではなく、「神からふさわしさ」が与えられたのであり、神が「新しい契約に仕える者」として「ふさわしくした」のである（３：４－６）、と自らの過去の経験（locus a persona）[92]に訴える。次に、「新しい契約」をモーセの「古い契約」を対照的に比較し（locus a comparatione）[93]、モーセの「栄光」よりもキリストの「栄光」がまさることを暫漸法（locus a minore ad maius）[94]を三度繰り返して用いて強調する（３：７－11）。そこでは恐らくモーセを論拠としていたパウロの批判者と対比して、旧約聖書（出エジプト記34：30）の解釈を巡って、対照的な議論を展開していると思われる。さらに、モーセの「顔覆い」（出エジプト記34：33－35）の寓喩的解釈（allegoria）[95]から、論敵らが根拠にするユダヤ人の心にこそ覆いが掛かっている、と相手の立場を「論駁」し（refutatio）[96]、霊的なキリストの自由と栄光へと変えられる内面の変容を対照的に述べる（３：12－18）。このように、修辞学的「論証」（probatio）の数多く

の手段を用いて説得しようと努めるのである。

②「栄光のキリスト」すなわち「証拠」（Signa，4：1－6）

まず最初に、以上のような「務め」は自分から得ようとしたのではなく、「憐れみを受け」てそうなったのである、という過去の経験に再び短く言及する（4：1）。次に、パウロの行為は「恥ずべき隠れた行い」によるのでもなく、「神の言葉を曲げた」のでもなく、「真理が現される所で、全ての人々の良心に対して、自分自身を推薦している」（4：2）と金銭的な問題で批判を受けていた問題に対して、「良心」という内面に「自分自身を推薦している」と正面から反論する。また、「自分自身を宣教しているのではなく、キリストを宣教しているのである」と批判の言葉を裏返して、その宣教の対象であるキリストとは、外面的なキリストではなく、神の栄光を鏡のように写し出した心の内側に輝く栄光のキリストであることを明らかにする（4：3－6）。すなわち、回心以来の自分の経験を修辞学的「証拠」(signa) として語るのである。

③「パウロの証し」すなわち「例証」(Exempla，4：7－15)

以上のような「栄光のキリスト」を心に宿すことは「素焼きの器に宝を持つ」という比喩（metaphora）[97]を用いて例えられる（4：7）。そして、このような霊的な宝を弱い肉体に宿して「新しい契約の務め」を担うパウロの生涯が「十字架の神学」(theologia crucis) を体現した逆説的な対比（antitheton）とアイロニー（ironia）を用いて表現される（4：8－14)。すなわち、「新しい契約の務め」に「ふさわしい」ことが身をもって、修辞学的「例証」(exempla) によって示されるのである。そして、第一の証明の終わりの言葉として、神を讃える称賛の言葉で結ばれる（4：15)。

b．中間の対比（Intermissum Antitheton，4：16－5：10)

第一証明と第二証明の間に、パウロの福音の内容と批判者の思想の対比（antitheton）が示される。すなわち、「内なる人」と「外なる人」、「永遠の栄光の重さ」と「一時の苦しみの軽さ」、「目に見えないもの」と「目に見えるもの」とを対比した導入（4：16－18）から始まる。次に、「天にある永遠の家」と「地上の天幕の家」、衣服を「着る」・「脱ぐ」・「裸」という比喩を用いて地上と天上の存在のあり方が対比され（5：1－5)、さらに「(家に) いる」と「(家から) 離れている」という対比的な比喩を用いて、天上と地上との間に板挟みになった存在のあり方が示される（5：6－10)。

c．第二証明（Secunda Probatio，５：11－６：10）

第二の証明は、「自分自身を推薦している」という問題、すなわち「誇り」と「恥」と密接にかかわる問題が論じられる。ここにおいても議論が展開するが、第一の証明ほど長くはないが、複雑な議論の構成になっている。それを大別すると、①「心の誇り」（５：11－15)、②「和解の務め」（５：16－21)、③「パウロの証し」（６：１－10）という構成に分けられる。

①「こころの誇り」すなわち「証拠」(Signa，５：11－15)

まず最初に、パウロは「主を畏れて人々を説得している」と宣教活動を修辞学の主要な概念である「説得する」という用語を用いて表現するが、やましい点がないこのような宣教活動が神に対して「露にされている」のと同様に、コリント人たちの「良心に露にされる」ようにという希望を述べる（５：11)。次に、このように述べて、「再び自分自身を推薦しているのではない」と３章１節の疑問を繰り返し、それを否定する。さらに、そうではなく、内面を誇るのではなく外面を誇るパウロ批判者に対して、自分たちについて「誇る」機会を与えたいのだ、と述べる（５：12)。ここには、パウロについて「誇り」をもつ、という第三「命題」の問題が直接的に表現されている。しかもそれは外面ではなく、内面を誇るという問題として表現されている。このような内容とパウロのヴィジョンを見たり異言を話す宗教的経験（12：２－４，Ⅰコリント13：１，14：６，参照）から、「気が触れている」と非難されていたと思われる。「もし気が触れているならば、神のためであり、もし正気であるならばあなたがたのためである」（５：13）と対比（antitheton）とアイロニー（ironia）的表現を用いて述べた後に、「神の愛が迫っている」という内面的経験とともにその背景にあるキリストの十字架に意義を説く（５：14)。そして、自分のために生きるのではなく、自分のために死んだキリストのために生きるという逆説（paradoxos）[98]な主張が述べられる（５：15)。このようにして、パウロの内面的な経験を修辞学的「証拠」(signa）として訴える。

②「和解の務め」すなわち「論証」(Argumenta，５：16－21)

まず最初に、「肉によって（人間的な基準で）人を知ることはしない」「肉によって（人間的な基準で）キリストを知ることはしない」なぜならば「もしだれかキリストにあるならば、新しく創られたもの（だから）である」という三段論法（sugglogoismus）[99] を用いる。そして、「肉

によってキリストを知っている」と主張するパウロの論敵ないしは批判者と対比（antitheton）して、「古いものは過ぎ去った」「見よ、新しくなった」と全く新しい立場を述べる（５：16－17)。次に、これら「全てが神から出ている」ことであり、「神はご自分と世を和解させ」、神はその「和解の務め」と「和解の言葉」をパウロに「委ねた」、と三段論法（sugglogismus）を用いて述べる（５：18－19)。このようにして、「自分から」「自分自身を推薦し」「自分を宣教している」という批判を否定する。さらに、和解の使者として神との和解を勧める（５：20－21)。すなわち、パウロ批判者はパウロばかりでなく、パウロの福音の使信をも全く理解していないので、勧告の言葉（exhortatio)[100]という形で「完全に理解すること」を求めるのである。

③「パウロの証し」すなわち「例証」(Exempla，６：１－10)

ここでも最初に旧約聖書（イザヤ書49：８、レビ記４：19、21）を引用しながら和解の言葉を受け入れることを繰り返して勧告（exhortatio）する（６：１－２)。次に、この「務め」が非難されないために「あらゆることにおいて、神に仕える者として自分自身を推薦している」（６：３－４ａ）という自己推薦の問題に再度言及する。そして、「あらゆることにおいて」とは何かが、具体的にパウロの生涯の「苦しみのリスト」（６：４ｂ－５）とそれと対照的な「聖霊の働きのリスト」（６：６）の中で述べられ、また対比（antitheton）とアイロニー（ironia）に満ちた「パウロの生涯の要約」（６：７－10）の中で明らかにされる。こうして、逆説（paradoxos）的な意味で「自分自身を推薦している」ことが、修辞学的「例証」(exempla）によって明らかにされる。

ｄ．結論（Peroratio, ６：11－７：４)[101]

パウロはここで、反論の結論として、一方では、コリント人たちに「心を開くように」と勧告の言葉が語られる（６：11－13、７：２ａ)。ところがその間に、短い「逸脱」(digressio）が挿入される（６：14－７：１)[102]。それがパウロの言葉であるなしにかかわらず、他方では、そこでコリント人たちに対する警告の言葉が述べられる。そして、結びの言葉として、パウロは「だれにも不正をせず、だれをも傷つけず、だれをも騙さなかった」と述べ（７：２b)、使徒職に「ふさわしくない」という批判を端的に要約して否定する。また、心のうちで生死を共にしているコリント人たちを大いに「誇っている」と述べて（７：３－４)、「自分自身を推薦している」問題と結びついたパウロを「完全に理解す

ること」と「誇りとすること」を示唆してこの箇所は終わる。

（5）陳述再開（Repetita Narratio, 7：5－16）[103]

2章13節までの続きが7章5節以下で展開される。すなわち、トロアスからマケドニアへ向かった旅程の叙述の続きが述べられる。第一に、マケドニアに着いたパウロは不安と戦いの中にあったが、コリントから帰還したテトスと再会することができ、またテトスがコリントについての朗報を伝えてくれたので、喜びと慰めが二重になる（7：5－7）。第二に、「涙の手紙」を書いたパウロは一時的にしろ後悔したが、今は喜んでいる。それに対して、「涙の手紙」を読んだコリント人たちは悲しんで、この問題に対して何も知らず、何もしなかったことを悔い改めた。悔い改めた結果、熱心に「涙の手紙」に応答して、当事者を処罰する。その経緯を知って、パウロは慰められる（7：8－12)。第三に、テトスの喜びによっても、パウロの慰めは一層増し加わり喜ぶ。テトスはコリント人たちの「畏れと戦き」によって迎えられ、コリント人たちが「涙の手紙」に従順に応答したことで心安らぎ、パウロはコリント人たちのことをテトスに「誇った」ことが「恥」にならずに、胸をなでおろす（7：13－15)。この箇所は、喜びの挨拶で締めくくられる（7：16)。このように書くことによって、悲しみと苦しみの中にいるコリント人たちに「慰め」と「喜び」を分かち合おうとするのである（1：3－7，参照)。

以上の陳述再開の箇所では、「涙の手紙」に対してコリント人たちの多数派（2：6）が応答したことで、パウロの使徒職の「ふさわしさ」の問題と「自分自身を推薦している」という問題は、少数派を除いて誤解が解けて和解したことを表している。すなわち、第二「命題」のパウロを「部分的に」理解してことから「完全に理解すること」に向かい、第三「命題」のパウロがコリント人を誇るように、コリント人たちがパウロを「誇りであること」に至る兆しが述べられる。

（6）結論（Peroratio, 8：1－9：15）[104]

「結論」(peroratio）では、それまで述べられてきたことを要約して記憶を新たにし、感情に訴えて行動を起こさせる。特に後者の機能は「議会弁論」(*συμβουλευτικόν*, genus deliberativum）に似ている[105]。だが、ここでは前者の機能を欠き、後者の機能のみしか見られない。

8章、9章が果して「結論」部分に属するのか否か、ということに関

しては、第一「命題」で「神の聖さと純粋さによって……行動してきたこと」を明らかにしようとするが、それはまさに募金活動という金銭問題に関すること。また、第二「命題」のパウロを「完全に理解すること」は、パウロの使徒職ばかりでなく、募金活動を含む宣教活動を理解すること。さらに、これらの二点は、第三「命題」の「パウロを誇ること」に結びつくこと。以上から、8、9章は独立した手紙の一部ではなく、1－9章が一貫した手紙であることは明らかである。

a．第一結論（Prima Peroratio, 8：1－24）

まず最初に、マケドニア人たちが苦しみの中から喜びが溢れ、極度の貧しさの中から施す豊かさに溢れて、自発的にまた期待以上に募金活動に参加したこと、パウロがテトスにコリントで募金を再開するように促したこと、さらにこれに対して、コリント人たちが、信仰、言葉、知識、熱心さ、愛を受けることなどあらゆる点においてアケドニア人たちよりも優っていることが対比（antitheton）的に述べる（8：1－7）。次に、コリント人たちに向かって直接的に、昨年から始めた募金を成し遂げるように助言する（8：8－12）。そして、それは他の者たちが安逸を貪り、コリント人たちが苦しむためではなく、余裕のある者が乏しい者に施すのは、「平等になるためである」と、パウロの募金活動を批判する意見に対して反論（probatio）し、それを旧約聖書（出エジプト記16：18）に根拠づける（8：13－15）。

この箇所の後半は、募金活動を実施するテトスと二人の兄弟を推薦する内容が「演示弁論」（ἐπιδεικτικόν, genus demonstrativum）の称賛するスタイルで書かれている。パウロはここで募金活動が誤解されないようにするために、信頼できるテトスをコリントに再度派遣するばかりでなく、募金が疑惑を招くことなく、また確実にエルサレムに届けられるように地域共同体から選ばれた人々をともに派遣するのである。これは第一「命題」の「神の聖さと純粋さによって……行動してきたこと」を例証（exemplum）しようとするものに他ならない。

b．第二結論（Secunda Peroratio, 9：1－15）

まず始めに、パウロが募金を先駆けて始めたコリント人たちのことをマケドニア人たちに「誇った」ことが無にならず、パウロもコリント人たちも「恥」をかかないために募金を用意しておくようにと促す（9：1－5）。この「誇り」と「恥」の問題こそ、第三「命題」のパウロが

「誇りであること」と密接に関係する。パウロにとってコリント人たちが「誇り」であるように、コリント人たちにとってパウロが「誇りである」ならば、具体的に募金を成し遂げるようになるからである。次に、惜しむ心からではなく、寛大な心から施すように述べ、パウロの募金活動への批判者に対して反論し（probatio)、旧約聖書（詩篇112：９，イザヤ書55：10，ホセア書10：12）から、それを根拠づける（９：６－10)。さらに、コリント人たちが募金に参加して成し遂げる目的は、エルサレムの貧しい人々の窮乏を満たすばかりでなく、そのことによってパウロばかりでなく、多くの人々が神に感謝を献げ、神を讃え、エルサレムの貧しい聖なる者たちがコリント人たちを慕うようになるためである、すなわち霊的な豊かさと交わりのためである、と述べて神への感謝の祈りで結ぶ（９：11－15)。

（７）まとめ

以上、修辞学の視点で第二コリント書１－９章の「本体」を分析してきた。書簡理論の分析に基づいて大きく三つに分けられる部分は、修辞学的単位になるが、それらは修辞学的分析ではさらに細分された単位に分割される。もし以上の分析が正しければ、第二コリント書１－９章は、「序論」「命題」「第一陳述」「反論」「陳述再開」「結論」という大きく分けて六つの部分から構成されており、またそれぞれが細部にさらに分解される。ここにおいても、「命題」とその展開、すなわち金銭問題の誤解を解き、パウロの使徒職と宣教活動を完全に理解して、募金活動を成し遂げ、パウロを誇りに思うことに関する議論の展開を追っていくと、ヴァイス＝ブルトマン仮説やシュミットハルス＝ボルンカム仮説に反して、第二コリント書１－９章は一つの纏まった手紙であることが分かる。また、書簡理論の視点では、いくつかの類型の「混合した書」に分けられるが、修辞学の視点では、とりわけ「陳述」が二分され、その間に議論の「逸脱」という形で「反論」が挿入される複雑な構成を成してはいるが、一つの一貫した議論が展開された書簡であることが分かる。

註

(1) 第二コリント書の分割説に関しては、それぞれの注解書の序論に述べられているが、18世紀から現代にいたる分割説について研究史的な視点と類型論的な視点では、それぞれ以下に詳しい。H.D.Betz, *2 Corinthians 8 and 9*, Philadelphia: Fortress, 1985, 3-36; R.Bieringer, "Teilungshypothesen zum 2.Korintherbrief: Ein Forshungsüberblick," R.Bieringer & J.Lambrecht, *Studies on 2 Corinthians*, Leuven: Leuven Univ.Press, 1994, 67-105.

(2) J.S.Semler, *Paraphrasis II. Epistolae ad Corinthios*, Halae Magdeburgicae: Hemmerde, 1776; H.Windisch, *Der zweite Korintherbrief*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1924; C.K.Barrett, *A Commentary on the Second Epistle to the Corinthians*, London: Black, 1973; V.P.Furnish, *II Corinthians*, New York: Double Day, 1984; R.P.Martin, *2 Corinthians*, Waco: Word, 1986; M.E.Thrall, *A Critical & Exegetical Commentary on the Second Epistle to the Corinthians*, Edinburgh: T&T Clark, 1994.

(3) A.Hausrath, *Der Vier-Capitel-Brief des Paulus an die Korinther*, Heidelberg: Bassermann, 1870; J.H.Kennedy, *The Second & Third Epistles of St.Paul to the Corinthians*, London: Methuen, 1900; A.Plummer, *A Critical & Exegetical Commentary on the Second Epistle of St. Paul to the Corinthians*, Edinburgh: T&T Clark, 1915.

(4) J.Weiss, *Das Urchristentum*, R.Knopf(Hg.), Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1917, 245-272; R.Bultmann, *Exegetische Probleme des zweiten Korintherbriefes*, Uppsala: Wretmann, 1947 (= idem, *Exegetica*, E.Dinkler [Hg.], Tübingen: J.C.B.Mohr, 1967, 298-322); idem, *Der zweite Brief an den Korinther*, E.Dinkler (Hg.), Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1976.

(5) W.Schmithals, *Die Gnosis in Korinth: Eine Untersuchung zu den Korintherbriefen*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1954, 20; idem, "Die Korintherbriefe als Briefsammlung," *ZNW* 64 (1973), 263-288; G.Bornkamm, *Die Vorgeschichte des sogenannten Zweiten Korintherbriefes*, Heidelberg: Carl Winter, 1961(= idem, *Geschichte & Glaube II,Gesammelte Aufsätze IV*, München: Kaiser, 1971, 162-194); idem, "The History of the Origin of the So-called Second Letter to the Corinthians," *NTS* 8 (1962), 258-264; D.Georgi, *Die Gegner des Paulus im 2.Korintherbrief: Studien zur religiösen Propaganda in der Spätantike*, Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1964; idem, *Der Armen zu Gedenken: Die Geschichte der Kollekte des Paulus für Jerusalem* (2.Aufl.), Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1994 (1.Aufl.,1965); Betz, 2 *Corinthians*.

（6）　第二コリント書６章14節から７章１節までの箇所に関する議論の研究史は、以下に詳しい。J.Lambrecht, "2 Korinther 6,14-7,1 im Kontext des 2.Korintherbriefes: Forschungsüberblick und Versuch eines Eigenen Zugangs," R.Bieringer & J.Lambrecht, *Studies on 2 Corinthians*, Leuven: Leuven Univ.Press, 1994, 551-570.

パウロの真筆でなく、また挿入された箇所である、という立場の代表的な例は、以下を参照。J.A.Fitzmyer, "Qumrân and the Interpolated Paragraph in 2 Cor 6,14-7,1," *CBQ* 23 (1961), 271-280; J.Gunilka, "2 Kor 6,14-7,1 im Lichte der Qumranschriften und der Zwölf-Patriarchen-Testamente," J.Blinzler et al.(eds.), *Neutestamentliche Aufsätze*, Regensburg: Pustet, 1963, 86-99 (ET = J.Murphy-O' Connor (ed.), *Paul and Qumran*, Chicago: Priory, 1968, 48-68); H.D.Betz, "2 Cor 6:14-7:1: An Anti-Pauline Fragment?," *JBL* 92 (1973), 88-108 (= idem, *Paulinischen Studien:* Tübingen: J.C.B,Mohr, 1994, 20-45). それとは対照的に、パウロの真筆であり、また挿入された箇所ではない、という立場の代表的な例は、以下を参照。G.D.Fee, "II Corinthians VI. 14-VII. 1 and Food Offered to Idols," *NTS* 23 (1977), 140-161; J.Lambrecht, "The Fragment 2 Corinthians 6,14-7,1: A Plea for Its Authenticity," *NTSupp* 48 (1978), 143-161 (= R.Bieringer & J.Lambrecht, *Studies on 2 Corinthians*, Leuven: Leuven Univ.Press, 1994, 531-549); M.E.Thrall, "The Problem of II CorVI.14-VII.1 in Some Recent Discussion," *NTS* 24 (1978), 132-148; G.K.Beale, "The Old Testament Background of Reconciliation in 2 Corinthians 5-7 and Its Bearing on the Literary Problem of 2 Corinthians 6.14-7.1," *NTS* 35 (1989), 550-581.

（7）　統一説の研究史について、詳しくは、以下を参照。R.Bieringer, "Der 2.Korintherbrief als Ursprüngliche Einheit: Ein Forschungsüberblick," R.Bieringer & J.Lambrecht, *Studies on 2 Corinthians*, Leuven: Leuven Univ.Press, 1994, 107-129. 最近の統一説の代表的な例は、以下を参照。W.H.Bates, "The Integrity of II Corinthians," *NTS* 12 (1966), 56-69; N.Hyldahl, "Die Frage nach der literarischen Einheit des Zweiten Korintherbriefes," *ZNW* 64 (1973), 289-306; R.Bieringer, "Plädoyer für die Einheitlichkeit des 2.Korintherbriefes," R.Bieringer & J.Lambrecht, *Studies on 2 Corinthians*, Leuven: Leuven Univ.Press, 1994, 131-179.

（8）　第二コリント書（特に１－９章に関して、10－13章関係は除く）の書簡理論的分析については、以下を参照。S.K.Stowers, *Letter Writing in Greco-Roman Antiquity*, Philadelphia: Westminster, 1986; D.E.Aune, *The New Testament in Its Literary Enviroment*, Philadelphia: Westminster, 1987, esp.,ch.5 & ch.6.

（9）　第二コリント書（特に１－９章に関して、10－13章関係は除く）の修辞学的分析については、以下を参照。G.A.Kennedy, *New Testament*

Interpretation through Rhetorical Criticism, Chapel Hill/ London: Univ.of North Carolina Press, 1984, esp.ch.4; Betz,*2 Corinthians;* idem, "The Problem of Rhetoric and Theology according to the Apostel Paul," A.Vanhoye (ed.), *L'Apôtre Paul: Personnalité, Style et Conception du Ministère*, Leuven: Leuven Univ.Press, 1986, 16-48, esp.152-161; F.Young & D.F.Ford, *Meaning and Truth in 2 Corinthians*, London: SPCK, 1987, esp.,36-40; F.W.Hughes, "The Rhetoric of Reconciliation: 2 Corinthians 1.1-2.13 and 7.5-8.24," D.F.Watson (ed.), *Persuasive Artistry: Studies in New Testament Rhetoric in Honor of George A.Kennedy*, Sheffield: Sheffield Academic Press, 1991, 246-261; idem," Rhetorical Criticism and the Corinthian Correspondence," S.E.Porter & T.H.Olbricht (eds.), *The Rhetorical Analysis of Scripture: Essays from the 1995 London Conference*, Sheffield: Sheffield Academic Press, 1997, 336-350; B.Witherington III, *Conflict and Community in Corinth: A Socio-Rhetorical Commentary on 1 and 2 Corinthians*, Grand Rapids: Eerdmans, 1995; H.-M.Wünsch, *Der paulinische Brief 2 Kor 1-9 als kommunikative Handlung: Eine rhetorisch-literatur-wissenschaftliche Untersuchug*, Münster: Lit Verlag, 1995.

(10) 以下で展開する書簡理論的・修辞学的視点から見た第二コリント書全体の注解は、山田耕太「コリントの信徒への手紙 II」『新聖書略解・新約篇』（日本キリスト教団出版局、1999年、出版予定）所収、参照。尚、本稿の続きである「第二コリント書10－13章の書簡理論的・修辞学的分析」は、『ペディラヴィウム』（原始キリスト教とヘレニズム文庫紀要）次号に掲載予定。また、本稿の英語改訂版は、Annual of the Japanese Biblical Institute（日本聖書学研究所欧文紀要）次号に掲載予定。本稿で引用する第二コリント書のテキストは、全て私訳による。

(11) Peudo Demetrius, *Τόποι Ἐπιστολικοί*. 尚、註11－14,17－18のギリシア語原典（註13は、ラテン語とギリシア語の併記）と英訳の対照版、ならびに註15－16,19のラテン語原典と英訳の対照版は、以下を参照。A.J.Malherbe, *Ancient Epistolary Theorists*, Atlanta: Scholars Press, 1988.

(12) Pseudo Libanius, *Ἐπιστολιμαῖοι Χαρακτῆρες*.

(13) Bologna Papyrus 5.

(14) Demetrius, *De Elocutione*, 223-235.

(15) Cicero, *Epistulae ad Familiares*, 2.4.1, 4.13.1, 12.30.1, 9.10.1; *Epistulae ad Atticum*, 8.14.1, 9.4.1, 9.10.1, 12.53.

(16) Seneca, *Epistulae Morales*, 40.1, 75.1-2.

(17) Philostratus, *De Epistulis*, II 257.29-258.28.

(18) Gregory of Nazianzus, *Epistula*, 51.

(19) Julius Victor, *Ars Rhetorica*, 27.

(20) Anaximenes, *Rhetorica ad Alexandrum*, cf.H.Rackham (ed.), *Rhetorica ad Alexandrum*, (LCL) Cambridge, MA: Harvard

Univ.Press / London: Heinemann, 1983.

(21) Pseudo Cicero, *Rhetorica ad Herennium*, cf.H.Caplan (ed.), [Cicero], Ad C.Herennium, (LCL) Cambridge, MA: Harvard Univ.Press / London: Heinemann, 1954.

(22) Cicero, *De Inventione, De Oratore, Orator*. Cf.H.M.Hubbell(ed.), *Cicero, De inventione, Topica et al*, (LCL) Cambridge, MA: Harvard Univ.Press / London: Heinemann, 1949; E.W.Suttonn (ed.), *Cicero, De Oratore, Books I-II*, (LCL) Cambridge, MA: Harvard Univ.Press / London: Heinemann, 1942; H.Rackham (ed.), *Cicero, De Oratore, Book III*, (LCL) Cambridge, MA: Harvard Univ.Press / London: Heinemann, 1942; H.M.Hubbell (ed.), *Cicero, Orator*, (LCL) Cambridge, MA; Harvard Univ.Press / London: Heinemann, 1962.

(23) Quintilian, *Institutio Oratoria*, cf.H.E.Butler (ed.), *Quintilian, Institutio Oratorio*, (4 vols.LCL) Cambridge, MA: Harvard Univ.Press / London: Heinemann, 1920-1922.

(24) Anonymous Seguerianus, Τέχνη τοῦ Πολιτικοῦ Λόγου; Apsines, *Ars Rhetorica*, cf.M.R.Dilts & G.A.Kennedy, *Two Greek Rhetorical Treatises from the Roman Empire: Introduction, Text, & Translation of the Arts of Rhetoric Attributed to Anonymous Seguerianus & to Apsines of Gadara*, Leiden: Brill, 1997.

(25) Menander Rhetor, cf. D.A.Russell & N.G.Wilson (eds.), *Menander Rhetor*, Oxford: Clarendon Press, 1981.

(26) Cf.Stowers, *Letter Writing*, 51-57, Malherbe, *Epistolary Theorists*, 2-11, J.T.Reed, "The Epistle," H.E.Porter (ed.), *Handbook of Classical Rhetoric in the Hellenistic Period 330 B.C.-A.D.400*, Leiden: Brill, 1997, 171-193.

(27) Demetrius, 223; Cicero, *Ad Fam*.12.30.1, *Att*.8.14.1, 9.10.1, 12.53; Seneca, *Ep*.40.1, 75.1-2; Gregory of Nazianzus, 51.4; Julius Victor, 27; Ps.Libanius, 58.

(28) Demetrius, 227; Cicero, *Ad Fam*.16.16.2; Seneca, *Ep*.40.1.

(29) Demetrius, 229.

(30) Cicero, *Ad Fam*.2.4.1; Julius Victor, 27.

(31) Julius Victor, 27.

(32) Gregory of Nazianzus, 51.4.

(33) Ps.Demetrius, 17, 18,; cf.Ps.Libanius, 22, 69.

(34) Ps.Libanius, 5, 52; Ps.Demtrius, 11, 7.

(35) Ps.Demetrius, 10, 3; Ps.Libanius, 30, 77, 6, 53.

(36) 36. Ps.Demetrius, 5; Ps.Libanius, 25, 72.

(37) Cf.Hughes, "The Rhetoric of Reconciliation," 247-248.

(38) Ps.Demetrius, 2; Ps.Libanius, 8, 55.

(39) Ps.Demetrius, 6, 4; Ps.Libanius, 34, 81, 17, 64

(40) Ps.Demetrius, 1; Ps.Libanius, 11, 58.

(41) O.Roller, *Das Formular der paulinischen Briefe: Ein Beitrag zur Lehre vom antiken Briefe*, Stutgart: W.Kohlhammer, 1933; P.Schubert, *Form and Function of the Pauline Thanksgivings*, Berlin: Töpelmann, 1939; idem, "The Form and Function of the Pauline Letters," *JR* 19 (1939), 365-377; D.G.Bradley, "The *Topos* as a Form in the Pauline Paraenesis," *JBL* 72 (1953); T.Y.Mullins, "Petition as a Literary Form," *NovT* 5 (1962), 46-54; idem, "Disclosure as a Literary Form in the New Testament," *NovT* 7 (1964), 44−50; idem, "Greeting as a New Testament Form," *JBL* 87 (1968), 418−426; idem, "Formulas in New Testament Epistles," *JBL* 91 (1972), 380-390; idem, "Topos as a New Testament Form," *JBL* 99 (1980), 541-547; J.T.Sanders, "The Transition from Opening Epistolary Thanksgiving to Body in the Letters of the Pauline Corpus," *JBL* 81 (1962), 348-362; C.J.Bjerklund, *Parakalô: Form, Funktion und Sinn der parakalô-Sätze in der paulinischen Briefen*, Oslo: Universitetsforlaget, 1967; R.W.Funk, "The Apostolic *Parousia:* Form and Significance," W.R.Farmer, C.F.D.Moule, R.R.Niebuhr (eds.), *Christian History and Interpretation: Studies Presented to J.Knox*, Cambridge: Cambridge Univ.Press, 1967, 249-268; G.J.Bahr, "The Subscriptions in the Pauline Letters," *JBL* 87 (1968), 27-41; W.G.Doty, "The Classification of Epistolary Literature," *CBQ* 31 (1969), 183-199; idem, *Letters in the Primitive Christianity*, Philadelphia: Fortress, 1973; J.L.White, "Introductory Formulae in the Body of the Pauline Letter," *JBL* 90 (1971), 91-97; idem, "Saint Paul and the Apostolic Letter Tradition," *CBQ* 45 (1983), 433-444; idem, "New Testament Epistolary Literature in the Framework of Ancient Epistolography," *ANRW* 25.2, 1730-1756; P.T.O'Brien, *Introductory Thanksgivings in the Letters of Paul*, Leiden: Brill, 1977; J.C.Brunt, "More on the Topos as a New Testament Form," *JBL* 104 (1985), 495-500; J.H.Roberts, "Pauline Transitions to the Letter Body," A.Vanhoe (ed.), *L'Apôtre Paul: Personnalité, Style et Conception du Ministère*, Leuven: Leuven Univ.Press, 1986, 93-99; F. Schnider &.W. Stenger, *Studien zum Neutestamentlichen Briefformular*. Leiden:Brill, 1987.

(42) Cf.n.8.

(43) K.Berger, "Apostelbrief und apostolische Rede: Zum Formular frühchristlicher Briefe," *ZNW* 65 (1974), 190-231; cf.n.9. このような修辞学批評の視点のみで分析することに対して、以下は批判的である。H.Hübner, "Der Galaterbrief und das Verhältnis von antiker Rhetorik und Epistolographie," *TLZ* 109 (1984), 241-250; C.J.Classen, "Paulus und die antike Rhetorik," *ZNW* 82 (1991), 1-33; idem, "St Paul's Epistles and Ancient Graeco-Roman

Rhetoric," S.E.Porter & T.H.Olbricht (eds.), *Rhetoric and the New Testament: Essays from the 1992 Heidelberg Conference*, Sheffield: Sheffield Academic Press, 1992, 265–291; S.E.Porter, "The Theoretical Justification for Application of Rhetorical Categories to Pauline Epistolary Literature," S.E.Porter & T.H.Olbricht (eds.), *Rhetoric and the New Testament: Essays from the 1992 Heidelberg Conference*, Sheffield: Sheffield Academic Press, 1992, 100–122.

(44) L.Thurén, *The Rhetorical Strategy of 1 Peter: With Special Regard to Ambiguious Expressions*, Åbo: Åbo Academi, 1990. 以下は分析の方法論において書簡理論と修辞学の概念とを混同させて用いた点で、Thurénの他に、Hübner ("Der Galaterbrief"), Classen ("Paulus," & "St. Paul's Epistles"), Porter ("The Theoretical Justification") らから批判された。H.D.Betz, "The Literary Composition and Function of Paul's Letter to the Galatians," *NTS* 21 (1975), 353–379; idem, *Galatians: A Commentary on Paul's Letter to the Churches in Galatia*, Philadelphia: Fortress, 1979.

(45) J.L.White, *Light from Ancient Letters*, Philadelphia: Fortress, 1986.

(46) J.L.White, *The Body of the Greek Letter*, Missoula: Scholars Press, 1972.

(47) Schubert, *Thanksgiving;* O'brien, *Introductory Thanksgivings;* Schnider & Stenger, *Briefformular*, 42–49.

(48) Sanders, "The Transition,"; White, "Introductory Formulae,"; Roberts, "Pauline Transitions,"; Schnider & Stenger, *Briefformular*, 50–68.

(49) ガラテヤ1：11、フィリピ1：12、ローマ1：13、参照。

(50) White, "Introductory Formulae," 69–70; Kennedy, *NT Interpretation*, 87; L.L.Belleville, "A Letter of Apologetic Self-Commendation: 2 Cor.1:8–7:16," *NovT* 31 (1989), 142–163; Withewrington, *Conflict & Community*, 335, 356–359.に反して。

(51) Bornkamm, *Die Vorgeschichte*, 19, 23, 32; P.Vielhauer, *Geschichte der urchristlichen Literarur*, Berlin/New York: de Gruyter, 1975, 153; H.-M.Schenke & K.M.Fischer, *Einleitung in die Schriften des Neuen Testaments*, vol.1, Berlin: Evangelische Verlagsanstalt, 1978, 112; Georgi, *Der Armen*, 46 n.55; Betz, *2 Corinthians*, 55, 57, 97, 143.

(52) Schmithals, *Die Gnosis*, 90–91; Bornkamm, *Die Vorgeschichte*, 32.

(53) Cf.n.2 & n.10.

(54) Ps.Libanius, 19, 66.

(55) Ps.Demetrius, 19; Ps.Libanius, 20, 67.

(56) Ps.Demetrius, 5.

(57) Ps.Libanius, 25, 72.

(58) 以下は、第一テサロニケ書の分析において、パウロが第一テサロニケ書で「パラクレートス書簡」という新しい書簡の類型を創造したことを主張し、第二コリント書1章1節－2章13節・7章5節－16節をも同じ分類であることを示唆するが、書簡理論と修辞学の深い所での相関関係を見落とし、「慰め」と「悲しみ」のモティーフの関連を見落としている（Ⅰテサロニケ4：13; 4：18, cf. 3：7, 5：11, 14, Ⅱコリント2：1－7, 7：8－11; 2：7, 7：6, 7, 13, cf. 1：4, 6参照)。原口尚彰「パウロによる新しいタイプの書簡の創造－Ⅰテサロニケ書のジャンルの問題」『新約学研究』第24号（1996年)、3－15。

(59) Bornkamm, *Die Vorgeschichte*, 21, 23; Schenke & Fischer, *Einleitung*, 111; Betz, *2 Corinthians*, 55, 57, 97, 143.

(60) Ps.Demetrius, 18.

(61) 8、9章の関係については、n.2 & n.10, 参照。

(62) Cf.n.4 & n.5.

(63) Cf, S.K. Stowers, "*περὶ μὲν γάρ* and the Integrity of 2 Corinthians 8 and 9," *NovT* 32(1980), 340-348.

(64) Ps.Libanius, 5.

(65) Ps.Demetrius, 11.

(66) Ps.Demetrius, 2; Ps.Libanius, 8, 55.

(67) Ps.Libanius, 45, 92.

(68) Cf.n.33, n.34 & n.36.

(69) 話し言葉である演説の修辞学は、「構想」(inventio)、「配列」(dispositio)、「文体」(elocutio)、「記憶」(memoria)、「実演」(pronuncitatio) という五部門で成り立っていたが、書き言葉である書簡の修辞学では、最初の三部門のみが重要である。ここでは主に「配列」の視点から分析する。

(70) Exordiumの範囲は、以下のように修辞学的批評家の間で異なる。Kennedy, *NT Interpretation*, 870 (1:3-8); Hughes, "The Rhetoric of Reconciliation," 250-251 (1:1-11); Witherington, *Conflict & Community*, 356-359 (1:3-7); Wünsch, *2 Kor.1-9*, 156-186 (1:3-11).

(71) Ps.Cicero, *Rhet.Her*. 1.6-11; Cicero, *Inv*. 1. 20-26; Quintilian, 4.1; Anon.Seguerianus, 1-39; Apsines, 249-260; cf.M.Heath, "Invention," S.E.Porter (ed.), *Handbook of Classical Rhetoric in the Hellenistic Period 330 B.C.-A.D.400*, Leiden: Brill, 1997, 89-119, esp.103-105; H.Lausberg, *Handbook of Literary Rhetoric: A Foundation for Literary Study*, D.E.Orton R.D.Anderson (eds.), Lieden: Brill, 1998, §263-288 (= idem, *Handbuch der literarischen Rhetorik: Eine Grundlegung der Literaturwissenschaft*, München: Max Hueber, 1960).

(72) Propositioの範囲は、以下を参照。Wünsch, *2 Kor.1-9*, 185-211 (1:12-14). 尚、Hughes, "The Rhetoric of Reconciliation,"

251-252では、1:12-14 を partitio と分類する。Witherington, *Conflict & Community*, 371-374 では、2:17を propositio と分類する。

(73) Ps.Cicero, *Rhet.Her*.2.28; Quintilian, 4.4; Anon.Seguerianus, 161-163; Lausberg, §§289, 346.

(74) Ps.Cicero, *Rhet.Her*.1.17 (enumeratio); Cicero, *Inv*.1.31-33; Quintilian, 4.5; Anon.Seguerianus, 173; Lausberg, §347.

(75) Wünsch, *2 Kor.1-9*, 212-230, Hughes, "The Rhetoric of Reconciliation," 252-257 (narratio & probatio?). 他方、Kennedy, *NT Interpretation* 87-88, は1:8-2:13をnarratioに区分し、Witherington, *Conflict & Community*, 360-370では、1:8-2:16をnarratio とする。

(76) Ps.Cicero, *Rhet.Her*.1.12-16; Cicero, *Inv*.1.27-30; Quintilian, 4.2; Anon.Seguerianus, 40-142; Apsines, 249-260; Heath, "Invention," 105-106; Lausberg, §§289－347.

(77) Quintilian, 5.7.3, 5.7.8-37; Lausberg, §§354,767-770.

(78) 注解書や緒論などで、しばしば議論の「逸脱」であることが指摘されてきたが、それが修辞学的「逸脱」であることはほとんど認識されてこなかった。Cf.Cicero, *Inv*.1.97; idem, *De.Or*.3,203; Quintilian, 4.3; Lausberg, §§340-342.

(79) Quintilian, 4.3.11-12, 17; Lausberg, §§288, 415, 431.

(80) Hughes, "The Corinthian Correspondence," 336-350 (probatio, 2:14-7:4); Witherington, *Conflict & Community*, 375-410 (probatio, 3:1-13:4); Wünsch, *2 Kor.1-9*, 225-292 (argumentatio, 2:14-7:3).

(81) Ps.Cicero, *Rhet.Her*.1.18-29; Cicero, *Inv*.1.34-77; Quintilian, 5.1-5; Anon.Seguerianus, 143-197; Apsines, 260-268; Heath, "Invention," 106-117; Lausberg, §§348-349.

(82) Quintilian, 5.12.9; Lausberg, §355.

(83) Lausberg, §§355-426.

(84) Quintilian, 5.1.1; Lausberg, §349.

(85) Quintilian, 5.13; Lausberg, §430.

(86) Cf.n.74.

(87) Cf.n.4 & n.5.

(88) Kennedy, *NT Interpretation*, 88 (propositio & partitio, 2:14-17) Hughes, "The Corinthian Correspondence," 339-341 (exordium et partitio, 2:14-17); Witherington, *Conflict & Community*, 371-374 (propositio, 2:17); Wünsch, *2 Kor.1-9*, 230-234 (eine exordale Einleitung, 2:14-2:16b).

(89) Ps.Cicero, *Rhet.Her*.4.21, 4.58; Quintilian, 9.2.101, 9.3.81-86, 93; Lausberg, §§787-807.

(90) Quintilian, 4.1.39, 6.2.15, 6.3.68, 8.6.54, 9.2.44-50, 97; Lausberg, §§582-585.

(91) Kennedy, *NT Interpretation*, 89-91 (the proof, 3:4-6:13) Hughes, "The Corinthian Correspondence," 336-350 (1st proof, 3:1-6; 2nd proof, 3:7-18; 3rd proof, 4:1-15; 4th proof, 4:16-5:10;

5th proof, 5:11-21); Witherinton, *Conflict & Community*, 5-410 (argument I, dividion 1, 3:1-18; division 2, 4:1-5:10; division 3, 5:11-6:2; division 4, 6:3-13; argument II, digression, 6:14-7:1); Wünsch, *2 Kor.1-9*, 234-292 (Die Zurückweisung der direkten Synkrisis, 2:16c-3:3; Eine andere Synkrisis, 3:4-18; Eine praeparatio, 4:1-6; Eine argumentatio a personae, 4:7-15; Die Frage nach dem *πρέπον*, 4:16-5:10; Das *ἦθος τοῦ λέγοντος*, 5:11-6:2; Die perorätio der apostolischen Rede, 6:3-13,7:2-3).

(92) Quintilian, 5.10.23; Lausberg, §§376.

(93) Lausberg, §§395, 404.

(94) Lausberg, §397.

(95) Lausberg, §§895-901.

(96) Cicero, *Inv*.1.78-96; Quintilian, 3.9.1; Apsines, 268-279; Lausberg, §430.

(97) Lausberg, §§558-564.

(98) Lausberg, §§64(3), 241, 323.

(99) Cicero, *Topica*, 54-57; Quintilian, 7.8.1-7; Lausberg, §221.

(100) Quintilian, 9.2.103; Lausberg, §1120.

(101) 逸脱の結論、cf. Lausberg, §441.

(102) Cf.n.6.

(103) Quintilian, 4.2.108; Lausberg, §313; cf.Wünsch, *2 Kor.1-9*, 142.

(104) Peroratio の範囲は修辞学的批評家によってかなり異なる。Kennedy, *NT Interpretation*, 91 (epilogos, 7:2-16, partitio, 2:14-1) Hughes, "The Rhetoric of Reconciliation," 256-261 (narratio et probatio, 7:5-7, 7:8-13a; peroratio, 7:13b-16; exhortatio, 8:1-24); Wünsch, *2 Kor.1-9*, 297-326 (Die repetita narratio, 7:5-8:6; Die probatio, 8:7-15; Die apostolische Parusie, 8:16-:5; peroratio und Briefschluß, 9:6-15; cf.Witherington, *Conflict & Community*, 407-428 (argument III, 7:2-16; argument IV, ch.8 & ch.9).

(105) Ps.Cicero, *Rhet.Her*.2.47-50; Cicero, *Inv*.1.98-109; Quintilian, 6.1; Anon.Seguerianus, 198-253; Apsines, 296-329; Heath, "Invention," 117-118; Lausberg, §§431-442.

Epistolary Theoretical & Rhetorical Analyses of 2 Corinthians 1-9

Kota Yamada

1. The Begining: Partition Theories of 2 Corinthians

The so-called "2 Corinthians", which was sent to the Corinthan community by Paul, has been presumed to be made up of several letters since the days of J.S.Semler (18th century German New Testament scholar), but we have no consensus over the partition even today. The partision theories are divided into the following four hypotheses.

(1) The Semler-Windisch hypothesis: the letter of chs.1-9 was written first and then followed by the letter of chs.10-13.

(2) The Hausrath-Kennedy hypothesis: the letter of chs.10-13 was identified with "the letter of tears" (2:4) and preceded to the letter of chs.1-9

(3) The Weiss-Bultmann hypothesis: the fragmentary letter of 2:14-7:4 with chs.10-13 (together "the intermediate letter") was written before the letter of 1:1-2:13, 7:5-16 (the treatment of chs.8 & 9 is different by the scholars).

(4) The Schmithals-Bornkamm hypothesis: the first apology of 2:14-7:4 was written prior to the second apology of chs.10-13 and the third letter of reconciliation of 1:1-2:13, 7:5-16 (chs.8 & 9 are treated differently).

In this article 2 Cor.1-9 (for the sake of space, 2 Cor.10-13 is treated elsewhere) is analysed by the ancient epistolary theories and ancient rhetorical theories in order to prove the integrity of chs.1-9 against (3) and (4).

2. Epistolary Theories and Rhetoric

Letters and speeches were the most important communicative ways in the Hellenistic & Roman periods. Though the ancient epistorary theories and the ancient rhetoric were different

literary genres, it seems likely that these two have been interpenetrated with each other for these reasons. First, most of the ancient epistolary theories were written by the rhetoricians who authored the rhetorical handbooks or by the orators who left many speeches. Second, the epistolary theorists suggested that letters should be written as a dialogue. Third, the epistolary theories must have been developed under the influence of rhetoric as seen from the facts that the basic epistolary types were classified into the rhetoical categories of the forensic speech (accusing, apologetic and accounting ones), the deliberative speech (paraenetic, advisory and admonishing ones) and the demonstrative speech (praising and blaming ones with consoling, commendatory, reproachful and censorious ones).

If so, the epistolary theoretical and rhetorical analyses are interrelated with each other, and thus both ones are used in correlation in this article, in spite of the facts that the Pauline epistolary forms were analysed in the former days and that either way of these analyses is becoming fashionable these days.

3. Epistolary Analysis of 2 Corinthians 1-9

2 Cor.1-9 is divided into the following letter types according to the ancient epistolary theories, particularly by Pseudo Demetrius and Pseudo Libanius.

(1) The Epistolary Prescript (1:1-2)

(2) The Epistolary Body (1:3-9:15)

a. A Consoling Letter (1:3-2:13, 7:5-16)

b. An Apologetic Letter (2:14—7:4)

c. Advisory Letters (chs.8 & 9; with a commendatory letter of 8:16-24)

(3) The Epistolary Postscript (if chs.1-9 are in one letter, now lost; or 13:11-13)

Similar divisions were given by the partition theorists (cf.1.(3),(4)), but they have connected these divisions with the source theories, thus they explained these divisions on account of the different sources. But the partition theories are

not natural when we consider why and how such and such fragmentary letters were stitched together at such and such particular places. On the other hand, it is natural that different letter types are seen in one letter of the mixed type.

4. Rhetorical Analysis of 2 Corinthians 1–9

The epistolary body of 2 Cor.1–9 consists of the following rhetorical divisions according to the ancient rhetoric whose rhetorical units are based on the epistolary theoretical divisions.

(1) Exordium (1:3–11)
(2) Propositio (1:12–14)
(3) Prima Narratio (1:15–2:13)
(4) Probatio (2:14–7:4)
  a. Exordium (2:14–16b)
  b. Partitio (2:16c–3:3)
  c. Prima Probatio (3:4–4:15)
  d. Intermissum Antitheton (4:16–5:10)
  e. Secunda Probatio (5:11–6:10)
  f. Peroratio (6:11–7:4)
(5) Repetita Narratio (7:5–16)
(6) Peroratio (chs.8 & 9)
  a. Prima Peroratio (ch.8)
  b. Secunda Peroratio (ch.9)

2 Cor.1–9 is made up in one letter against the partition theories (cf.1.(3) & (4)), particularly it is clear when we follow the logic of the propositio and partitio with its development. [For details of this article in English, cf. *Annual of the Japanese Biblical Institute, 24* (1999)]